

# 文芸思潮短歌季評

今号も、朝日新聞の「日曜歌壇」に載っている短歌をあげることから始めたい。八月一四日に選者がそれぞれ十首を選んで掲載された短歌の中で、特にその選者が秀でてい、推薦するとした歌には☆印が付けられている。今回は試みにその☆印の歌をすべて並べてみる。

高野公彦選。

☆ゼレンスキー氏がユニクロのCMに出るようなそんな日が早く来てほしい

☆マイク持つ安倍元総理に写りこむ犯罪者となる前のその顔

☆孫の手で借りては儉約せぬ祖父父母赤字国債平たく言えば  
☆一学きのお楽しみ会教室に大きなピタゴラススイッチ作る

第二選者の永田和宏氏は、前の三つに同じ☆印を付けている。

第三選者の馬場あき子氏は高野氏の選んだ「一学き——」に加えて、

☆投げっぱり倒しっぱりがすこくって母じゃない母を知る

ボウリング

を選んでいる。

最後の選者佐佐木幸綱氏は「投げっぱり——」だけに☆を与えている。

まず何よりも問題なのは、ここに採り上げられる短歌のレベルの低さだろう。ここにあるのは、本来近代短歌の基軸をなす生活や生きることや主体的な感情の吐露や詠嘆や自然描写ではない。テレビやインターネットを見たり、マスコミを通して得られる知識やニュース画像に対する浅い反応である。マスコミの短歌は、いつの頃からか、社会のニュース現象に対する皮相的な反応表現が闊歩するようになってしまった。社会現象を短歌の形式に嵌め込んで、事件の社会反応に同調していることによって得られる浅薄な快感、共同感である。「安倍元総理」の短歌にしても、犯人の顔の緊迫感を出ているものの、その奥にあるものについては、結局何も切り込んでいかない、正義の衣を借りた野次馬の眼差しでしかない。こういう社会事件に対する同調短歌は、逆に真にもつを眼を曇らせていくだけだろう。こういう作品に☆印を付けて「佳い」とする選者の見識が疑われる。

また日本短歌の伝統の一つである、「調べ」という点でもあまりにお粗末だ。これらの☆印短歌の中で、調べを感じるものはない。日記の文として書いた方がいいも

のばかりである。

私はこのような短歌ばかりもし自分のところへ集まってきたら、箒で集めてまとめてゴミ箱に捨ててしまいたい。文芸思潮短歌賞に応募されてきたら、A・B・CのうちのC評価だろう。

また、歌壇の編集として、集まってくる短歌の処理の仕方にも問題があるように見える。このように選者が皆同じようなものを重複して選ぶことに、何の意味があるのか。異なった作品を選ぶところに選者が四人もいる意味があるのではないか。もともと数が集まらないからあえて重複しても回しているのか、選者にも、運営の仕方にも貧困を感じる。

朝日歌壇は日本の短歌をダメにしている。

こういう傾向は朝日新聞や大手の新聞だけではないのかもしれないと思ひ、「歌壇」と言う歌誌を買って読んでみたら、懸念が的外れではないことが確認された。巻頭の「黙黙」と題した伊藤一彦氏の六ページにわたる連作の中にそれが見られる。

伊藤氏はわざわざ個人的な付き合いの人をあげて

馬場さんと同じ年生まれと知りてより、ミッキーマウス  
いよいよ親し

てくるような言葉ではないだろう。原発一つ、あれだけの重大事を招きながらまだ増やすなどと言っている現実を疎かにして、頭の前だけで遠くの戦乱を危ぶむ姿勢は、本質的なものからむしろ遠ざかっていくだけである。こういう作風が短歌の主流となることを、私はむしろ危ぶむし、同調主義への便乗を警戒する。詩人の高村光太郎も、志賀直哉も、シンガポール陥落を喝采する詩や文章を書いていることを忘れてはならないだろう。短歌の立場は、どこまでも身辺をよりどころにし、命を見つめて自然の中で響き合う、あるいはそこに置かれた現実のなかで燃焼する自身の魂でなければならぬだろう。それがとりもなおさずそのまま平和を愛することになっていくはずだし、かけがえのない世界への深い思いになっているはずである。

今季は地方の短歌誌をとりあげられなかったが、「アララギ」の系統を引く長野県の歌誌「ヒムロ」にはやはりいい歌が見られるので、それだけは載せておきたい。

881号及び907号から――

夜三度起き出でて仲秋の月仰ぐ明日の命尚恃みつつ

小林靖子

直目には会ふ日なくとも是の世に在すと安らぎるたりしものを

「馬場さん」に御丁寧小さく「馬場あき子氏」と添え書きが付いている。おそらく朝日歌壇の選者と想われるが、このような個人的なことを公の場で歌う神経がわからない。この歌に何の意味があるのか。

また後半にはウクライナの戦争が出てきて、

人口の減少対策も目的と、「戦ではウクライナ市民百万人以上が、ロシアへ」他国民拉致、シベリア移送

惨状が映像に届くウクライナ衆心城を成す言も届く

むつかしい離岸と着岸 戦争の岸は夢中に先行き見え

忘れてはならぬこの前のあやまちの柳条湖事件、盧溝橋事件

とさらに戦争への言及短歌が続くが、こうした短歌は、皮相部分で戦争をなぞるだけで、自分は安全なところにいる、言葉や思いでその戦争の本質に迫っていると錯覚している偽善がある。またこの筆者がどこまで「柳条湖事件」「盧溝橋事件」の当時の実情について認識しているのか疑わしい。むしろ知らないから言えることのような気がする。これらの事件の真相は戦後になって初めて明らかになったことで、当時の民衆は知らされてはいなかった。たとえ知ったところで、それを阻止することが困難なことは、当時踊らされた国民がほとんどだったことを考えると、安易に出

たっぷりと水浸みゆけりこの土に溢れて萌えむ勿忘草は

中山やすゑ

満天星の紅葉も褪せて冬ぎれの庭に目を引くあららぎの青

橋本佳代子

日本の近代短歌の基盤として、正岡子規の「歌よみに与ふる書」はいまだに重要と思うので、これから毎号現代文に直して載せ、読んでもらうことにした。一つ一つは短く、十回に及ぶものの、子規の姿勢は、よくわかってもらえると思う。

(五十嵐勉)



## 歌よみに与ふる書

## 正岡子規

連載第一回

おっしゃる通り最近の和歌はいっこうに振るわない状況です。正直に言えば、万葉集以来、源実朝以来、まったく振るわない状況と言えます。実朝という人は三十歳にもならないうちに、いざこれからというところで、あえなく最期を遂げられ、まことに残念なことでした。あの方をもう十年も生かしておいたなら、どんなにたくさんの方の名歌を残したかもしれません。とにかく第一流の歌人です。あながち柿本人麻呂や山部赤人の歌の流れに追随するというのもなく、もちろん紀貫之や藤原定家の歌跡に踏み従うなどとは遥かに遠く、自己の本領を屹然と持ち、あたかも山岳とその高さを競い、日月と光を争おうとするような高邁な志のもとに作歌するにあつては、思わず畏怖の念さえ抱き、膝を屈して敬わずにはいられないほどです。古来、実朝が凡庸の人と批評されてきたことは、まったくの誤りで、北条氏の勢力を憚<sup>はば</sup>つて、本来の姿を隠そうとしたのか、そうでなければ大器晩成の人だったのか、どちらかと推し量られます。人の上に立つほど文学技芸の道を究めた者は、人間としては地位があまり高くないところにいるの

が通例ですが、実朝はまったく例外です。なぜなら、実朝の歌はただ器用というのではなく、力量があり、見識があり、威勢があり、時流に染まることなく、世間に媚びることもなく、風流に墮した物数寄な連中や、死に歌よみの公卿たちととても同列に論じられるような人ではありません。人間として立派な見識のある人でなければ、実朝の歌のような力のある歌は詠み出せるものではないでしょう。賀茂真淵は力を極めて実朝を褒めた人ですが、真淵の褒め方ではまだ足りないように思います。真淵は実朝の歌の妙味の半分の面を理解していますが、他の半分の面を理解していないからです。

真淵は短歌については近世の達見家で、万葉崇拜など、当時にあつて実に偉大な業績を残していますが、私の眼から見れば、なお万葉集のよさを褒め足りないように思います。真淵が、万葉にも善い調べと悪い調べがあると言うことをたいへん気にして、それを繰り返言っています。社会の人が万葉集の中の佶屈なる（堅苦しく難解なこと）歌を取り上げて「これだから万葉はだめだ」などと攻撃するのを、恐れたようにも窺えます。もとより真淵自身もそれらを善い歌とは思っていないゆえに、弱みも出ていたのかもしれない。しかしながら世人が万葉集の中の堅苦しいと評す歌や、真淵が悪しき調べと言う歌の中には、私が最も好む歌もあるのです。それはどうしてかと原因を探る

と、他の人々の作歌は言うまでもなく、真淵の作歌にも、私が好むところの万葉調という内容の歌はまったく見当たらないのです（もつとも、この辺の論は短歌についての論と言うことになりませんが）。真淵の家集を見て、真淵は存外に万葉のわからぬ人と呆れてしまうこともありましたが、

こう言うからといって、すべて真淵をけなすわけではありません。楯取魚彦は万葉を模した歌をたくさん詠み出しましたが、なおこれがいいと思うような歌は極めて少ないようです。それほどに古調は擬しがたいものなのかもしれません。近來私らの知っている人たちの中に、歌よみではないのに、かえって古調を巧みに模する人が少なからずいるの歌は、今の歌よみならぬ人の歌よりも、はるかに劣っているのかもしれないと心細い気持ちになりました。となると今の歌よみの歌は、昔の歌よみの歌よりもさらに劣っているのではないかと推察されますが、いかがなものでしょうか。

長歌のみはやや短歌と異なります。『古今集』の長歌などは箸にも棒にもかかりませんが、このような長歌は古今集時代にも後世にもあまり流行らなかったことがもつけない幸いとなったのでしょうか。ですから後世においても、長歌をよむ者は直ちに万葉集を師とする者が多く、そういう姿形でかなりの長歌の作品が残っているように思われます。

今日でも、長歌を好んで作る者は、短歌に比べれば多少手際よくできるようです（御歌会派の気まぐれに作る長歌などは端唄にも劣っています）。しかしある人はそれを非難して、長歌が万葉の模型を離れることはできないと笑っています。それはもつともではあつても、歌よみにそんなむずかしいことを注文するのは、古今集以後ほとんど新しい歌はないと言ふことになってしまふでしょう。まだいろいろ言い残したことはありますが、後に譲りましょう。



正岡子規